

音楽学習を効果的ならしめるために 相互作用を中心に

佐 伯 正 一

前 が き

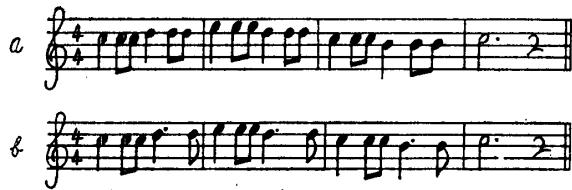
教師・生徒の相互作用については、学校長の一般的な考えに基づいて、音楽学習ではどのような具体的なことになるかを考えてみたのである。まず、音楽学習の中の知的理解以外の学習領域では、理解の程度の限界が他の知的教科に比べて大変漠としている。

つまり、ある曲を指導する場合、全体で楽しんで歌えるようになればよいもの、あるいは音程・リズム・発声・発音などいろいろ要素的なものが、的確にとらえられていなければならないとするもの。さらに、その曲の内容的なものを充分理解し、その表現を正しいものにまで訓練しなければならないとするもの。またその上に、暗譜・階名唱・調・楽式・写譜など、その曲に関連ある理解を上げるならば、いくつも考えられると思うが、生徒の素質、音楽学習のできる程度などを考えると、その理解させられる一定の限界が決められない。

この意味において、他の知的教科と比べて、客観的な水準を決められないのではないか。だから、音楽学習では生徒の音楽的実体に基づいて、そこから豊かに発展させていくものでなければ、音楽はむずかしいものであるという観念だけが残ることになるのではないか。こんな点から次のような研究を試みて明日の学習指導への足がかりにしたいと思った次第である。

本 論

1. リズム感について



中1生徒に上記の楽譜のハーモニカ及び笛の楽器指導をしていた際に、a曲については全員問題はなかったのであるが、b曲の付点四分音符のリズムになると大変乱れてきたので、全体指導を試みたが、一向によくならない。それを男女別にしてみると、女子は大体

よくできるが、男子は相変わらずリズムの乱れが目立っている。そこで男子全員51名について個人的な実体を調べ、できない者に対し、宿題として、音楽の時間毎にその正否を調査したのが第1表である。

第1表

第1回	7	14%
第2回	22	43%
第3回	8	16%
第4回	10	19%
第5回	2	4%
第6回	2	4%

第1回に14%しかできなかったのに、第2回には43%もできたということは、少しの努力によっては相当数の者が第1回にもできたのではないと思われる。また、このような回を重ねなければ、容易にできない者が、ある程度数を占めていることは、指導上に問題があることを感じさせられた。

次に第1表の2回以後の生徒について、なぜできなかったか、という調査についての結果。

第2表

1. 練習ができなかった。	11
2. 練習をしたができなかった。	7
3. リズムがわからない。	23
4. リズムがわかるが、楽器ができない。	3

リズムがわからないから、といった者が44人中23人もいたということは意外である。

このような最も基本的なリズムを、あいまいにはあくしているのは、全体指導のみにたよってその欠点が目立たないからである。このような基本的なものはグループまたは個人指導の重視を痛感される。

次に、どうしたらできるようになったか、という調査の結果。

第3表

1. 自分だけで練習した。	3/
2. 家族の者に教えてもらった。	0
3. 友人に教えてもらった。	20

第3表については、半数以上の者が自分で練習してできたし、友人に教えてもらってできた者も相当いたということは、技術を身につけるためには友人によることの大きいことを知った。

次に「どの程度の努力をしたらできたか」という調査の結果。

第4表

1. 一寸努力したらできた。	25
2. ある程度努力した。	18
3. 相当努力してやっとできた。	8

以上第1表から第4表までの表によって、考えられることは、生徒は授業中に努力すれば、もっと効果を上げることができる余裕をもっているということである。また、教師の立場からは、その余力をのばすためのあらゆる機会を与えてやらなければならない指導上の方法を考えなければならない。

2. レコード鑑賞のきき方について

中1男女93名を対象にハイドン作曲弦楽四重奏「皇帝」の主題を器楽で演奏させ、この曲を一通り説明した後で教科書の主題および変奏の楽譜を見せながらレコードを聞かせた。一通り聞かせた後で、2回目を聞かせている途中、第3変奏のなかばでレコードを止めて次のような調査を行った。

1. 今止めたところは何変奏であったか。
2. また主題を演奏していた楽器は何か。

第5表

1. 旋律の流れだけをきいていた者。	18
2. 楽器の種類だけを知っていた者。	6
3. 旋律の流れと楽器の種類、両方をきいて知っていた者。	28
4. きいていなかった者。	39

93名中第3変奏を答えられた者が18名、ピアノを答えた者が6名で、両方答えられた者28名に対して、両方とも答えられなかった者が39名もいた。聞いていてもわからなかったのか、聞いていなかったのかの調査はしなかったが、どちらかといえば、聞いていなかった者が大部分ではないだろうか。いずれにしても、鑑賞に関心をもっていなかった者が約42.3%もいたことは意外であった。音楽を与えてもそれを受け取ろうとしない者の多いのには今後大きな問題として残る。

3. 既習曲の理解について

歌曲「追憶」について歌唱指導の中で第6表のような知的な諸要素を理解させながら歌唱指導を深めていった。その後で第6表の調査を中3男女45名について行なった結果、速度以外の諸要素の解答率は大変高い。

第6表

調	44	国名	35
二部形式	45	動機	37
aa' ba'	44	小楽節	45
速度	24	大楽節	45

これに対して歌曲「ドナウ川のさざなみ」の指導の方は、ただ歌曲を歌うだけのものとして取扱った。一通りの歌唱指導の後で調と拍子についてどの程度理解されて歌っていたかの調査の結果、次のような低率の結果となった。

第7表

調	4
拍子	17

4. 歌唱教材のはいり方について

新しく歌唱教材にはいる場合、階名視唱からはいるのが望ましいと思うが、視唱能力が高くないのと、時間的な余裕がないので、時間的に能率的で、しかも、視唱能力も次第につけられる効果的な方法はないものかと考え、階名視唱の場合と、まず楽器の視奏の場合とを比較してみた。また、この場合でも、ピアノをつけた場合とそうでない場合とを比較して、その実体を比較してみた。

次の第8、9表は、新教科「山小屋のともしび」を中3男女90名を対照に調査したものである。

第8表

階名視唱	34
楽器視奏	56

第9表

1. 階名視唱

	○	×
ピアノなし	7	83
ピアノ付	39	51

2. 楽器（ハーモニカ）

	○	×
ピアノなし	25	65
ピアノ付	48	42

第8表では、階名視唱と楽器視奏とでは、楽器の方が相当容易であることがわかる。また、ピアノをつけた場合と、つけない場合とでは、視唱においては問題なく前者が圧倒的である。一般的に視奏からはいるのが容易で、また、ピアノをつけた方がさらに容易である。

しかし、視奏の有利なものには、調の制限がある。

5. 知的理解について

中3男女90名について次の7問を与え、調査した。7問の具体的な内容は紙面の都合により省略するが、大体次のようなものである。

問題1. ある音を音名で示し、それを主音とした調を答えよ。(2問)

問題2. 調名を示し、その派生音の音名を答えよ。(2問)

問題3. 平行調, 同名調について (2問)

問題4. 移調させる。(完全解答, 不完全解答)

問題5. 既習曲の記譜について (完全解答, 不完全解答)

問題6. 短調の和音について

問題7. 音程について

この7問を第1回テスト結果では正解30%の低調さであったので、さらに、答案に採点して返す時に不明な点の説明を加えて次回テストを約し、第2回目を同程度、同種内容でテストを行なった結果次のような表になった。

第1, 2回の数字は90名中の正答者の数字。○は完全解答, △は不完全解答

第10表

	第1回		第2回		●	×
問題1	42		50		22	8
問題2	11		35		24	3
問題3	42		65		34	7
問題4	○ 18 △ 22	○ 37 △ 21			25	5
問題5	○ 6 △ 14	○ 18 △ 10			12	0
問題6	3		15		14	2
問題7	49		62		24	11

● 1回目にできなかったが2回目にできた。

× 1回目にできたが2回目にできなかった。

総 点 数 1080

第1回得点総数 322

第2回 " 518

第1回解答率30%に対し、第2回は48%で、予想以上に伸びなかったのが意外であった。

●印の1回目にできなくて2回目にできたのは、それだけ理解ができたことになるが、×印の1回目にできて2回目にできないのは、1回目の理解が不安定で偶然にできたものと考えられる。

この調査で感ずることは、音楽の知的面について、

全体的には低調である。それは生徒が興味がないのか、努力をしようとならないのか、いずれにしても音楽教育の主体は音楽それ自体であることを再認識させられるのではないだろうか。

◎音楽筆答成績と5教科(国・社・数・理・英)の成績との相関について

第11表

音 楽 筆 答 成 績							
国・社・数・理・英 総合成績		9以上	8~7	6~5	4~3	2~1	0
	8以上		3	2	1		
	7~5	1	4	3	4	1	
	4~2	1	1	4	9	5	
	1~-1		3	4	11	6	
	-2~-4				5	13	2
	-5以下				1	6	3

相関係数 0.67

結 び

1. 歌唱指導においては、リズムの的確な指導が望まれる。なぜならば、リズムは音楽の要素中最も大切なものであるからである。

また、視唱力の育成は、視奏によるところ大きいと考えられ、それとの関連指導を巧みに考え合わせなければならない。

2. 音楽の自学的なものは、歌唱によるものよりも楽器による方が、生徒にとって望ましいように思われる。それは、歌唱の自学は音程の作るむずかしさと変声時期を含んでいる中学では、殊に男子においては好ましからざることと考えられる。その点楽器は歌唱困難の条件が除かれるので、楽器における自学は比較的容易であるから、この点を考え合わせて音楽に対する自学心を向上させたいものである。

3. 鑑賞指導では、生徒が何を受取っているかは、私達教師の大いに関心を持つべきところであろう。生徒が音楽を受け付ける心の整理をしてやらなければ、教育の意味が成り立たない。受け付ける心はどうして与えたらよいかという大きな問題にぶつかることが考えられる。

以上の事柄から音楽を好む生徒にしなければならない。つまり音楽そのものに対する魅力を感じずる生徒に育てなければならないと思う。